

奴隷制度の不安への訴え

—Edgar Allan Poeの小説に取り憑く「黒さ」と「白さ」

小林 潤

序

Edgar Allan Poeはアメリカ合衆国において長い間正当な評価を受けていなかった。それはFrancis Otto Matthiessenがその大著1941年の *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* において、19世紀中葉のアメリカ文学活動を、Ralph Waldo Emerson、Henry David Thoreau、Herman Melville、Nathaniel Hawthorne、Walt Whitmanを中心にアメリカン・ルネサンスを論じたことの影響が大きい。Poeが評価されるようになったのはPoeの死後約一世紀も後のことである。

現代におけるPoe研究の活性化には、Toni Morrisonの1993年の著書 *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* におけるPoe文学の評価が関わっている。Poeはアメリカ南部で成長し、そしてリッチモンドやボルティモアで最も実りある年を過ごしたにも関わらず、彼は“darky”に関して多くは語ろうとしなかった。しかしMorrisonは1936年にアメリカ文学者¹がPoe作品の“Negro”という言葉の研究することにより、多くを語らないPoeと人種を関連付けた研究が進められることになったと指摘している。

In 1936 an American scholar investigating the use of Negro so-called dialect in the works of Edgar Allan Poe (a short article clearly proud of its racial equanimity) opens this way: “Despite the fact that he grew up largely in the south and spent some of his most fruitful years

in Richmond and Baltimore, Poe has little to say about the darky.”
(Morrison 10)

更にMorrisonは同著で*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* (1838) を取り上げ、Poeのアンテベラム期における重要性を “No early American writer is more important to the concept of American Africanism than Poe.” (Morrison 32) と述べ、1990年代以降のPoe研究の再興に大きく貢献し、近年のPoe研究やPoe批評は人種問題やPoeの黒人や奴隷制度に対する考えについてより精緻な議論がなされるようになった。そして更に時は流れ、2009年1月19日にPoe生誕200周年を迎え、Poe研究も更なる盛り上がりを見せているといえるだろう。

Poeは奴隷制度を基盤とするアメリカ南部で主に創作活動をしており、南部の生活様式や文学環境に身を置いていた。Poeの作品には何らかの形で人種の問題が影を落としている。しかし、その作品には直接的に黒人奴隷の姿を描くとは限らない上に、一見人種表象とは関係ないような物語もある。しかし、そのような物語を読み解くことでPoe作品の中の人種や奴隷制度をめぐる問題について明らかにしてゆきたい。

本稿では、Poeの短編小説を取り上げることで人種化された「黒さ」というものが、Poeの想像力にどのように取り憑き、またそれが純粋な「白さ」とどのように関わっているのか、分析してゆくこととする。

1. 道化師から復讐者へ

Poeは自身が亡くなった1849年に “Hop-Frog” というある王国の道化師の復讐劇を描いた短編小説を完成させた。雑誌投稿当時の正式名称は “Hop-Frog; Or, The Eight Chained Ourangoutangs” である。タイトルにもなっているホップ-フロッグ (以下、用語の混乱を避けるために “Hop-Frog” の登場人物をホップ-フロッグと呼ぶ) とは強制的に彼の故郷から連れてこられた “dwarf” であり、彼の真の名前は物語の中では言及されていない。その “dwarf” は特に残酷な冗談が好きな国王の宮廷道化師となり、国王にホップ-フロッグというニックネームを与えられる。彼には若く美しい友人 Trippetta がおり、同じ境遇同士惹かれ支え合って過

ごしていた。ある日仮面舞踏会を開くことになり、その時の催しとして何かアイデアはないかと国王は道化師の二人を招集する。苛立っていた国王はホップ・フロッグと Trippetta に悪戯をするのだが、ここでホップ・フロッグは終に怒り、国王や大臣に盛大な復讐劇を行うことを決意する。その後彼は仮面舞踏会で国王や大臣にオランウータンの仮装をさせて、火をつけて燃え上がらせた。仮装の一環で全身にタールを塗っていたため彼らはすぐに燃え上がり、燃やした張本人のホップ・フロッグと Trippetta はその様子をしり目に城の天窓から逃げ去る。

Poe のホラー小説はしばしば人種の表象と読むことができる動物や人種的他者が登場する。例えば “The Murders in the Rue Morgue” (1841) に登場するオランウータンや “The Black Cat” (1843) に登場する黒猫である。この物語において人種を連想させる登場人物は足の不自由な “dwarf” ある。Paul Christian Jones は 「“Hop-Frog” も Poe のその他の作品も人種を連想させる人物の恐怖に基づいて描かれている。しかし、“Hop-Frog” では、Poe はまず初めにホップ・フロッグに対して同情を作り上げている」 (Jones 239) と主張している。確かに Jones のいう通り、“Hop-Frog” は前半二人の道化師が国王に残酷な悪戯をされることで、読者に彼らに対してシンパシーを抱かせるような構成になっている。しかし、物語の後半は、二人の道化師はそれまで隠匿していた感情を露わにし、復讐者と化す。Jones は人種の表象に序盤シンパシーを抱かせるこの物語と、そうではない Poe のその他の作品との相違について 「ホップ・フロッグの恐ろしい性質が顕現するまで彼にシンパシーを抱かせる “Hop-Frog” が、奴隷が明らかに恐怖の表象であるその他の作品と異なっているからこそ、この物語は奴隷制度についてより洗練された主張となったのである」 (Jones 240-41) と述べている。

この物語には国王と大臣がオランウータンに仮装するシーンがあるが、正式なタイトルの副題にも登場することから重要なモチーフだと考えられる。オランウータンといえば “The Murders in the Rue Morgue” にも登場することは有名だが、同じオランウータンでも一方は本物でもう一方は人間の仮装という決定的な違いの他に、両者にはもう一つ違いがある。前者は作中 Madame L’Espanaye と彼女の娘を殺す側であり、後者は

ホップ・フログと Trippetta に火で燃やされて殺される側である。また前者は主人によって長年拷問や虐待を受けていたのに対し、後者は逆にホップ・フログや Trippetta に長年酷い仕打ちをしてきた。主人による長年の虐待がホップ・フログやオランウータンといった復讐者を生み育ててしまったのである。主人である国王にとってみれば、それまでどんな仕打ちをしても反抗してこなかった宮廷道化師が突如復讐者へ変貌し、主人を殺害するのである。

1831年、ヴァージニア州サザンプトンで起きたナット・ターナーの反乱以降、1830年代には奴隷蜂起の恐怖が広がり、奴隷所有者の多くが自分の身近にナット・ターナーのような人物がいるのではないかと慄いた。このような背景を鑑みると、この物語の国王は当時の奴隷所有者、ホップ・フログがナット・ターナーのような奴隷を表象しているといえるだろう。自分が所有している黒人奴隷がいつ虐待に耐えかねて、奴隷から復讐者へと変わって所有者である主人に報復するか分からない。Poe は復讐者の描写を用いることで、現実の奴隷所有者が抱く奴隷反乱の恐怖や危険性や可能性を描いているのである。物語の最後、ホップ・フログと Trippetta が脱出するシーンは次のように描写される。

The cripple hurled his torch at them, clambered leisurely to the ceiling, and disappeared through the sky-light. It is supposed that Trippetta, stationed on the roof of the saloon, had been the accomplice of her friend in his fiery revenge, and that, together, they effected their escape to their own country: for neither was seen again. (447)

注目すべきは彼らが行ってきた一連の行為を Poe が “fiery revenge” と記していることである。Jones によれば「炎に包まれた復讐」というテーマは、Poe が奴隷に対するシンパシーを醸成する奴隷廃止論者文学のレトリックの危険性を模倣しているのだという。

物語後半部分の仮面舞踏会にはホップ・フログと Trippetta と国王と大臣以外にも仮面舞踏会を見に来た群衆が存在する。この群衆には、読

者ひいては当時のアメリカ国民を体現するという大事な役割がある。群衆は序盤こそ仮面舞踏会の催しを楽しんでいたが、徐々に様子がおかしいことに気付き、国王と大臣が燃え上がる時など恐怖に打ちひしがれてしまう。恐怖に震えている聴衆をしり目に、ホップ・フロッグはシャンデリアを伝って城から逃亡する。取り残された群衆は凄惨な現場に戦慄するのはもちろんだが、道化師が国王と大臣を燃やして当の本人は天窓から逃げるという全く予想し得ない結果を目の当たりにすることになる。復讐を完遂した復讐者は、今まで味わってきたすべての屈辱が胸の中からなくなり、それまで主人から受けていた虐待から真の解放を得ることができた。奴隷が主人の虐待を耐えている様子が当時のアメリカ合衆国の奴隷制度の縮図であるならば、奴隷の復讐が成功し、主人が地に伏し奴隷が高い位置に立つという、視覚的なステータスの逆転もまた今度起こり得る奴隷暴動に怯える合衆国の縮図である。ナット・ターナーの反乱以降の奴隷制度の恐怖について、J. Gerald KennedyはAlison Goodyear Freehlingの言葉を借りて「最も危険なのは黒人奴隷の集団暴動ではなく、奴隷個人の暴力行為である。奴隷使用人はいつでも白人の食物に毒を盛ることができるし、眠っている奴隷所有者とその家族を殺すことができる」(Kennedy 229)と述べている。ホップ・フロッグにシンパシーを抱かせた後、復讐者という恐ろしい一面を登場させて主人に復讐するというストーリーを紐解くことで、所有している奴隷の復讐の可能性や奴隷や奴隷文学への過度の共感が奴隷反乱を招きかねないという南部社会の不安をも読み取ることが可能である。

2. 所有物の声

1843年8月19日、Poeは雑誌*The Saturday Evening Post*に彼の作品の中でも最も有名な物語“The Black Cat”を発表した。“The Black Cat”は彼の短編小説“The Tell-Tale Heart”(1843)や“The Imp of the Perverse”(1845)同様に“perverseness”(204)をモチーフにして書かれている²。いずれの作品も登場人物はスキャンダラスな感情や欲望を経験し、おぞましい行為を犯し、そしてその極端な状況下に自分自身を見出す。暴力、監禁、死、手足の切断といったテーマは読者の感覚に対し

で直接働きかけるため、当時アメリカで流布したセンセーショナルな物語への嗜好に依拠している。

この物語の主人公である語り手は動物好きで、結婚した妻も同じであったため、自宅では様々な動物を飼っていた。その中でも特にPlutoという名の黒い猫がお気に入りだった。しかし語り手は徐々に酒癖が昂じて、家族に対して虐待をするようになったのである。遂には大好きだった黒猫の片目を抉り取ってしまったのだ。その後虐待に関して反省はしたものの苛立ちは抑えることができず、ある朝Plutoを庭の木に吊るして殺害してしまう。その晩語り手の家は原因不明の火事で焼け落ち、焼け残った壁には巨大な猫の姿が浮かび上がった。それからしばらくして語り手はPlutoと同じ黒猫が欲しくなり、偶然酒場にいた黒猫を連れ帰ったのだが、よく見るとその猫には片目がなく、胸元にはまるで絞首刑台のような白い斑点があり、語り手は次第に黒猫に嫌悪や恐怖を感じるようになる。恐怖に取りつかれた語り手は黒猫を斧で殺そうとするが妻に止められてしまう。邪魔する妻に腹を立てた語り手は妻のことを殺し、地下室の壁に埋め込んだのである。その後黒猫を始末しようとしたが、見つからなかった。数日後警察が妻の捜査のために語り手の家を訪れ、地下室で話をしている時、妻を埋めたはずの壁の中から猫の鳴き声がし、妻殺しが露見した語り手は、絞首刑となる運命にある。

“The Black Cat”の中で、胸元に“GALLOWS” (207) の模様を持つ第二の黒猫は最も重要な表象の一つである。絞首刑台は語り手の有罪と墮落のシンボルであり、また彼の犯罪を視覚的に示唆している。長い間アメリカ南部で過ごしてきたPoeにとって黒人が木に吊るされている場面を見ることはそれほど珍しいことでもなかったため、Plutoがリンチにかけられた黒人奴隷の視覚的寓意であることを想像するのは容易である。この物語の中で人種や奴隷制度について直接の言及はないが、Poe作品は彼の時代の圧迫した社会問題のコンテクストとして読まれるべきである。

And now was I indeed wretched beyond the wretchedness of mere Humanity. And a *brute beast* ... a man fashioned in the image of the High God ... an incarnate nightmare that I had no power to shake off

- incumbent eternally upon my heart! (207)

このパラグラフは第二の猫が語り手にとって最大の恐怖であることが書かれている。ペットの黒猫はいつしか“a brute beast”と化し、自らを「全知全能“the High God”」に譬える語り手は、自身の所有物である黒猫に支配されるようになる。彼が第二の黒猫のことを“an incarnate nightmare”と呼んでいることから、第二の猫はその外観により第一の猫より更に強く語り手を抑圧していると考えられる。飼い猫に抑圧されるに至ることで、語り手は所有物への支配力を失う。飼い主とペットの関係は、奴隷所有者とその所有物の関係のパラレルと読むことができる。なぜなら当時の奴隷所有者の考え方について Terence Whalen は「当時の法律上、奴隷所有者は奴隷に対しても動物に対しても同等の権利を有していた」(Whalen 33) と述べているからである。当時奴隷は奴隷所有者によってまるで動物のように売買され、虐待され、そして殺害されていた。この物語でも、語り手が黒猫を虐待し、そして殺害している。しかし、その残虐な行為のせいで、第一の黒猫同様に自らの所有物になった第二の黒猫に精神的に抑圧されてしまう。“The Black Cat”に登場する虐待された猫のイメージは拷問にかけられた黒人を表現しているという寓意を使って、Poe は彼の時代の黒人への扱いや奴隷制度についての不安や不確実性や反乱の恐怖を明らかにしている。Kennedy は、Poe の作品と当時の奴隷反乱の不安に対する読者の見解について「Poe の描く物語は当時流行していた奴隷反乱の恐怖を利用しているという見解を示す読者もいた」(Kennedy 252) と述べている。

物語の最後、語り手は警官に対する空威張りから妻の亡骸のある壁を軽く叩き、その壁の中から返ってきた黒猫の「声」は次のように描写される。

No sooner had the reverberation of my blows sunk into silence than I was answered by a voice from within the tomb! ... conjointly from the throats of the damned in their agony and of the demons that exult in the damnation. (208-09)

これがただの猫の鳴き声ならこのような長い描写にはならない。先も述べた通り、語り手は第二の黒猫に心理的抑圧を与えられている。地獄や悪魔といった表現は、相手に恐怖を感じているからこそのものである。語り手にとっては悍ましい「声」によって妻の死体と彼の犯罪が露見することになる。語り手は妻を殺害したのち、人間である彼女のことをまるで“merchandise” (207) 「商品」のように扱おうとする。彼にとっては黒猫も妻も「所有物」に過ぎないのである。これは奴隷制度における奴隷所有者の考えと同じである。彼らは奴隷のことを「所有物」と見做し、それを労働や資本に変えて生活している。「所有物」として扱われてきた妻と黒猫が「声」を発することで、語り手の罪を露見させ、彼を死刑執行すべく絞首刑台へと送ることになる。“The Black Cat”は、黒人奴隷あるいは女性を当たり前のように「所有物」だと思っている奴隷所有者の罪、そして人間を商品化せざるを得ない奴隷制度の罪を表象しているのである。また、奴隷所有者は「所有物の声」によって自らの立場が危ぶまれる可能性があるということも示唆している。

3. 逆転する所有関係

1838年に、Poeは雑誌*American Museum of Science and the Arts*に“*How to write a Blackwood Article*”と“A Predicament”を連作として発表した。“How to write a Blackwood Article”では「^{センセーション}感覚」の重要性が説かれているのだが、この「^{センセーション}感覚」とブラックウッド調についてGodduは以下のように述べている。

Poe was indebted to Blackwood's for his sensational style as well as his understanding of how to write serious literature and still attract a popular audience. (Goddu 96)

センセーショナルな小説が当時アメリカ合衆国で非常に売れており、特に黒人が苦しんでいる様子をのぞき見るような物語が広範囲で楽しまれていた。1839年に発刊され、後にベストセラーになった奴隷制廃止論者Theodore Weldによって書かれた*American Slavery As It Is*などはまさに

その例だといえよう。センセーショナルな物語が大衆の人気を博している
と分かっていたため、彼は奴隷廃止論者にも関わらず奴隷廃止論の基本
原則を書こうとせず奴隷制度のせいで巻き起こっている恐ろしい真実を
書いたのである。Weld本人も「奴隷たちの現実の状態についての真実や
証言によりアメリカに恐怖のスリルを感じさせることができた」(Goddu
92) と主張している。Poeは時代の流れを考慮してセンセーショナルな奴
隷言説を用いた奴隷小説を利用した方が良いと判断し、“How to write a
Blackwood Article” と “A Predicament” の中にそれを用いたのだろう。

この二つの短編小説の主人公はどちらも共通して Signora Psyche
Zenobia という女性である。前篇にあたる “How to write a Blackwood
Article” では Zenobia が *Blackwood's Magazine*³ のブラックウッド氏に作
品をどのように書けばいいのかを聞きに行き、「^{センセーション}感覚」の重要性を説か
れ、そしてその教えに忠実に従って “A Predicament” を書くという繋がり
になっている。Zenobia には Pompey という黒人召使いと Diana という
小さな犬がおり、共にエディンバラを散策しようとするところから “A
Predicament” は始まる。散策中彼女たちはゴシック風の教会の時計塔を
見つけ、Zenobia はその塔の高みからエディンバラ全体を見渡したいとい
う衝動に駆られるのだ。螺旋階段を上ると、高さ七フィート程のところ
に小穴があって、その小穴から景色を眺めたいと思った Zenobia は Pompey
の肩に乗って小穴から首を出した。しばらく眼下に広がる風景を堪能した
あと、Zenobia は首筋に冷たい感覚が走り、それが時計塔の長針であるこ
とに気付くものの、時すでに遅く、身体も抜け出せない状況になってお
り、長針は徐々に彼女の首に食い込み、圧迫された眼球は順番に両方落ち
て斜面を転がってゆく。そして時計の針が五時二十五分を指すと首と胴体
は完全に切り離されてしまう。切り離された胴体を見た Pompey は一目散
に逃げ、一方 Diana はネズミに食べられて骨になってしまう。

この物語では Pompey は黒人とのみ称され奴隷と言及されることはない
が、Pompey という名は他の Poe 作品では奴隷の名として用いられている⁴。
例えば “The Man That Was Used Up” (1839) に登場する黒人従者と “The
Business Man” (1840) に登場する黒い犬である。Pompey というキャラ
クターの中に人種的なステレオタイプを繰り返し用いることで、Poe はこ

これらのステレオタイプの慣例を強調しようとしている。Godduは、“Poe unveils his culture’s racial code — its conventional dehumanization of the slave.” (Goddu 101).として、Poeは文化的な人種コードつまり奴隷の人間性の剥奪を明らかにしようとしていると述べている。Pompeyの名前の再利用のように、奴隷を表す上で人種的ステレオタイプをPoeが繰り返して使用していることを考えると、“A Predicament”に登場する黒人Pompeyは人権を奪われた奴隷の典型例なのではないだろうか。

ここでは“A Predicament”における奴隷制度への言及を「所有」という概念を手掛かりに考察してゆきたいと思う。“And Pompey, my sweet negro! — sweet Pompey! How shall I ever forget thee?” (293) これは物語でPompeyについて描写されているシーンの冒頭部分である。所有格の“my”が使われていることから分かるように、ZenobiaはPompeyのことを自分の所有物だと考え、そのように扱っている。Zenobiaにとって何かもしくは誰かを所有していると宣言することは、信頼や愛情表現の形とみることができる。このことは私たちに“The Black Cat”に登場するPlutoとその主人である語り手の不気味な関係を思い出させる。「所有」という言葉は主人と奴隷、もしくは主人とペットの間の関係を明確にする言葉であり、似たような関係が南北戦争以前のアメリカ南部における男性と女性、白人と黒人の間にも見られ、メイソン・ディクソン線の南側での暮らしの長かったPoeはこのような関係に非常に精通していた。Pompeyはこのような状況下でも従順な使用人のように振る舞い続けるのだが、物語が進むにつれて女性であるZenobiaが男性のようにPompeyに対して酷い振る舞いをしてしまうために二人の所有関係は徐々に崩壊し始めてしまう。

ナット・ターナーの反乱以降、主人と奴隷の関係は正当化されるようになった。南北戦争前のアメリカ南部では、女性は家や家族を守って家から出るべきではないという風潮があったため、女性はあらゆる議論から蚊帳の外とされてきた。当時極めて少数の女性しか表舞台に立つことができず、政治や経済に参加することなどほとんど許されていなかった時代である⁵。その時代の女性の代表であるZenobiaが権力を持ち、Pompeyに対して男性のような振る舞いをするので物語は整合性の破綻を迎えてしまうことになる。

Sweet creature! she too has sacrificed herself in my behalf. Dogless, niggerless, headless, what now remains for the unhappy Signora Psyche Zenobia? Alas — *nothing!* I have done. (299)

これは物語の最後の文章で、Zenobiaの世界において、それまで肉体も Pompey も Diana も自分の所有物だったのに、首と胴体が切り離され、Pompey には逃げられ、Diana は死んでしまい、今の自分には何もない状況を嘆いているシーンである。それまで何の疑いもなく「所有」していたものが、彼女の男性社会への侵入というジェンダー規範の逸脱により一気にひっくり返り、所有の整合性が破綻した瞬間である。これは「所有」という概念が必ずしも主人から奴隷への一方通行のものではなく、ジェンダーと人種のヒエラルキーの相互関係の中に存在し得るということを示していると考えられる。

Poe は数多くの作品で「想起させるようなセンセーショナルな恐怖を取り入れている。Poe はもしこのような力関係が逆転するようなことがあれば、主人と奴隷、白人と黒人、男性と女性の間関係に基づいて構成されてきたアメリカ南部のシステムもまた崩壊する危険性や可能性を暗示している。

4. 主客の転覆

“William Wilson” は1839年10月に *Burton's Gentleman's Magazine* に発表された。この物語では自らの無意識下の良心の声を表すドッペルゲンガーや分身というテーマを扱っている。彼の他の作品に比べたらさほどゴシックやメロドラマの色彩は強くないが、“William Wilson” は Poe 作品の中で非常に重要な位置を占めている。

物語は語り手が自身の本名ではない William Wilson という偽名を紹介するところから始まる。彼は幼少期から興奮しやすい気質を持っており、少年時代はイギリスの学校の寄宿舎で過ごした。学校の中でもすぐにリーダー格になった Wilson だったが、ただひとりだけ彼に従わない少年 William Wilson がいた。第二の Wilson は語り手と同姓同名だけでなく、見た目や身振り手振りまでも同じで、学校の様々な場面で互いをライバル

視して競い合っていた。ある日語り手は第二の Wilson の寝室に侵入して彼の顔を見るが、あまりに似た容貌により恐怖に襲われ、そのまま寄宿舎から逃げ出してしまふ。その後語り手はイートン校に入学、更にオックスフォード大学へ入学、大学退学後はパリやローマやウィーンにまでも足を運ぶが、どこへ行っても彼の追跡のせいで野望を台無しにされてしまふ。語り手はついにある夜ローマ侯爵家の仮面舞踏会で第二の Wilson と決着をつけることを決意する。舞踏会場にある控室で二人の Wilson はついに剣を抜いて決闘し、語り手の剣が第二の Wilson の胸を幾度も突き刺した。すると語り手にそっくりの姿が血にまみれた顔をして、まるで自分が喋っているかと錯覚するかのように最後の言葉を遺していった。語り手にそっくりな彼は、語り手 Wilson の分身だったのである。

In a time when many argued for sharper categorizations and more hierarchy, when ladies, slaves, and men endured ever more difficult trials of definition, Poe managed to confound and denaturalize the ‘natural order’ of things. (Dayan 189)

Joan Dayan は Poe 作品には自然の秩序、つまりそれまで当然とされていた物事を転覆させるような内容が描かれているという⁶。これはあらゆる Poe 作品に当てはまることだが、主人公とその分身が登場するこの “William Wilson” では、語り手 Wilson と分身の Wilson の関係の転覆を指すことになる。幼少期から語り手は分身のことをライバル視して、毛嫌いもしていたが、相手の態度の中に愛情を秘めているように感じられたためどこか憎めないでいた。むしろ尊敬の念や尊重の気持ちも多くあり、お互いこのような立場でさえなければおそらく友情をも感じられたようだ。しかし明確な愛情を感じ取ることができなかった語り手は徐々に憎しみを抱くようになり、最終的に殺害してしまうことになる。

この一連の流れに酷似している物語が二つある。それは “The Tell-Tale Heart” と先の章で考察した “The Black Cat” である。どちらも主人公である語り手が初めは対象に愛情を注いでいたにもかかわらず、次第にそれが憎悪へと変化してその憎悪が彼らを殺人へと追いやることに

なる。これら三つの物語の中で語り手の感情の変化が最も合理的なのは“William Wilson”だと考えられる。その理由は、語り手の道徳性が彼と彼の分身の関係あるいは分身への感情の悪化に伴って変化していると考えられるからである。彼の分身は初め自律性や自主性を持っていなかったが、語り手と接していくうちに自主性を持ち始める。この頃は多少の嫌悪感はあるけれども憎悪を抱くほどではなかったのだが、忌々しい態度やおせっかいな干渉が繰り返し行われるにつれ、次第にWilsonの立場を脅かすような存在へと変わり、彼にとって不愉快極まりないものになる。そして最終的には彼の分身が完全に自主性を持つことになり、二人の立場は逆転してしまう。つまり両者の間では主客の転覆が起こってしまう。故に、そのことに耐えかねた語り手は殺害を犯してしまうのである。多少恐怖を感じつつも完全に自分の立場の方が上だと思っていたオリジナルのWilsonが、立場が下である分身に取って代わられる様は、主客の転覆が行われており、支配者と被支配者の立場が逆転する様子を表現しているといっていだらう。

主客転覆が起きている一方で、それまでWilson達の色彩の明示がほとんどされてこなかったにも関わらず、突如“A mask of black silk entirely covered his face.”(567)という「黒」の描写が登場する。二人とも同じ仮装をしているのだから、「黒い絹の仮面」は両者が着用していることになる。しかし最終的にはオリジナルのWilsonが分身を殺すことで、「黒い絹の仮面」を着けた彼はひとり取り残されてしまう。それまで主体であったWilsonが客体のWilsonに脅かされ、最後には人種化された「黒い絹の仮面」を装うこの様子は、まさに奴隷制度における主客の転覆を表しているだろう。つまりこの物語は主従関係が転覆する可能性や危険性、またそのような転覆状況が支配者と被支配者の感情の変化によっていかに起こりやすいかということを示唆しているのである。

結論

Poeは1831年のナット・ターナーの反乱の後にアメリカ合衆国の未来に不安や心配が差し迫っている状況下で数々の作品を発表した。またアメリカ奴隷制度の暗い側面を知悉したPoeは混乱した社会の時代を生き抜

いてきた。しかし、Poeが如何に奴隷制度や奴隷廃止論に対して主義や主張を持っていたとしても、彼の文学はそれを直接的に伝えることはせず、当時の読者の需要を満たしていたセンセーショナル小説の言説環境のなかで、読者の恐怖や不安といった「^{センセーション}感覚」に訴えることで奴隷制度の現実を描いたことである。Godduは「Poeは奴隷制度の言説や扇情主義を利用することで、彼自身の作品を商品化して、当時の文学市場へ売り込んだ」(Goddu 107-08)と述べている。Poeが本稿で取り上げたような小説を書き続けたのも、ホラーやゴシックなどのセンセーショナルな小説こそ読者の感情を煽りやすいと考えたからなのだろう。

Poeの中にある黒と白のイメージを、読者を扇情させるような小説に投影することで、Poeは読者ひいてはアメリカ合衆国に奴隷制度の諸問題を訴えかけたのである。“The Black Cat”のように、語り手と黒猫の登場により奴隷制度における所有者と所有物の関係性の転覆を分かりやすく論じている作品もあれば、“William Wilson”のように、人種や色彩の明示が無く一見奴隷制度と関係ないと思わせる作品もある。しかし両者読み解いてみると結局は奴隷制度のもとで人種化された「黒さ」と「白さ」のイメージが存在しているのである。

Poeの作品には奴隷制度の人種化された「黒さ」と「白さ」のイメージと密接な関係にあるものが数多く存在する。彼は自らに取り巻く黒と白のイメージを登場人物に投影し、「黒さ」を表象している人物に奴隷反乱の強い力を持たせて復讐や転覆を起こさせている。そうすることで、奴隷反乱の危険性や、白人と黒人の上下関係が崩壊して立場が入れ替わる可能性を示唆している。しかし、Poeのほとんどの作品はいずれも復讐や転覆の先に待っているのは主人の「死」である。Poeは被支配者が支配者に復讐することで彼らが解放される様子を描くことで、奴隷制度の危険性や奴隷反乱の可能性を示唆しようとしているのは間違いない。しかし一方で、奴隷制度にシンパシーを抱き、奴隷廃止運動を狂信的に推し進めてしまったら、その行為自体が奴隷反乱を助長しかねないとも示唆しているのだ。Poeは奴隷制度の危険性、奴隷反乱の可能性、奴隷制度に対する過度な同情といった複数の視点から「黒さ」や「白さ」を物語に投影することで、19世紀アメリカ合衆国の根底にある奴隷制度の不安を訴

えかけているのである。

注

- 1 Morrisonの指摘するアメリカ文学者とはKillis Campbellのことであり、彼は“Poe’s Treatment of the Negro and of the Negro Dialect”の中で、Poeが“Negro”という方言をどのように扱ったかについて説いた。
- 2 この点に関して平野は「してはいけない、しない方が望ましい、すると身の破滅を招く、にもかかわらず、まさにしてはいけないがために、してしまう」(Y45) ことが「黒猫」と「天の邪鬼」と「告げ口心臓」の共通点だと述べている。また、「語り手が——殺人現場に警官を招き入れるのは仕方ないとしても——必ずしもそうするには及ばないにもかかわらず、わざわざ彼らをそこに長居させるような行動をとる」(Y46) 点は“perverseness”の表れの一例だと主張している。
- 3 *Blackwood’s Magazine* は1817年にJames Hoggを共著の中心人物に出版された大衆向けの雑誌である (Levine 149)。
- 4 たとえばKennedyは、“The Man That Was Used Up”のPompey、“The Gold Bug”のJupiterは黒人召使いの固定観念的役割を担っており、Poeは当時の白人が黒人は人種的に劣っているという態度を持っていたことを理解してこれらの名前を用いていると指摘している (Kennedy 237)。
- 5 西田は当時のアメリカの女性観をBarbara Welterの言葉を引用して「物質主義の世の中で十九世紀のアメリカの男性が宗教的価値観を怠るようになる一方、女性はあらゆる価値観の抵当として家庭に縛りつけられていた」(西田 186) と述べている。
- 6 Dayanは自然の秩序以外にも「Poe作品では“human”と“brute”の間で容易に逆転が起こり得る」(Dayan 94) と述べている。

引用文献

- Campbell, Killis. “Poe’s Treatment of the Negro and of the Negro Dialect.” *Studies in English* 16 (1936): 106-114. Print.
- Coviello, Peter. “Poe in Love: Pedophilia, Morbidity, and the Logic of Slavery.” *ELH* 70.3 (Fall 2003): 875-901. Print.
- Dayan, Joan. “Amorous Bondage: Poe, Ladies, and Slaves.” *American Literature* 66.2 (June 1994): 239-73. Print.
- . “Poe, Persons, and Property.” *Romancing the Shadow: Poe and Race*. Ed. J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg. Oxford: Oxford UP, 2001. 106-26. Print.

- Gura, Philip F. “Essaying Antebellum Prose.” *Reviews in American History* 24.1 (Mar. 1996): 21-28. Print.
- Goddu, Teresa A. “Romance and Race.” *The Columbia History of the American Novel*. Ed. Emory Elliott. New York: Columbia UP, 1991. 89-109. Print.
- . “Poe, sensationalism, and slavery.” *The Cambridge Companion to Edgar Allan Poe* (2002): 92-112. Print.
- Jones, Paul Christian. “The Danger of Sympathy: Edgar Allan Poe’s ‘Hop-Frog’ and the Abolitionist Rhetoric of Pathos.” *Journal of American Studies* 35.2.2 (Aug. 2001): 239-54. Print.
- Kennedy, J. Gerald. “Trust No Man: Poe, Douglass, and the Culture of Slavery.” *Romancing the Shadow: Poe and Race*. Ed. J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg. Oxford: Oxford UP, 2001: 225-58. Print.
- Lee, Maurice S. “Absolute Poe: His System of Transcendental Racism.” *American Literature* 75 (Dec. 2003): 751-81. Print.
- Levine, Robert S. “Slavery, Race, and American Literary Genealogies.” *Early American Literature* 36.1 (2001): 89-113. Print.
- Levine, Stuart, and Susan Levine. Ed. *The Short Fiction of Edgar Allan Poe*. Urbana: U of Illinois P, 1966. Print.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and Literary Imagination*. 1st Vintage Books ed. NY: Vintage, 1993. Print.
- Poe, Edgar Allan. *Edgar Allan Poe: Complete Tales and Poems*. New York: Castle Books, 2009. Print.
- Weissberg, Liliane. “Black, White, and Gold.” *Romancing the Shadow: Poe and Race*. Ed. J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg. Oxford: Oxford UP, 2001. 127-56. Print.
- Whalen, Terence. “Average Racism: Poe, Slavery, and the Wages of Literary Nationalism.” *Romancing the Shadow: Poe and Race*. Ed. J. Gerald Kennedy and Liliane Weissberg. Oxford: Oxford UP, 2001. 3-40. Print.
- 西田みさお. 「多重基準な女性観—『ベレニス』『モレラ』『ライジーア』」. 『ポーと雑誌文学—マガジニストのアメリカ』. 野口啓子・山口ヨシ子編. 東京: 彩流社, 2001. 185-206.
- 平野幸彦. 「ポーとディケンズの『狂気もの』について」『人文科学研究』(新潟大学人文学部) 122 (2008)、Y37-Y53.